



12 琉球中城之東門

一面

山本芳翠

明治二十一年(一八八八)

油彩、キャンバス

五九・〇×四四・六

雲の白さが際立つ青空のもと、日傘を差した女性が楼門へとつながる石造りの階段を上っていく。画面下半分を占める濃淡様々な色調の石積みに対して、濃い影を落とす繁みの様子から、南国らしい日差しの強さがうかがわれる。これは明治期の沖縄を描いた山本芳翠(一八五〇～一九〇六)の連作のうちの一点である。

明治二十年(一八八七)、初代内閣総理大臣伊藤博文は明治天皇の命を受けて九州沖縄地方の巡視を行い、その折、芳翠に各地の様子を描かせ天覧に供した。この連作は合計二十点からなり、本作以外にもスケッチや写真をもとに沖縄の風景や人々が描かれた。制作当初の額縁に取り付けられたプレートには「琉球中城之東門」と記されるが、近年の研究では、実際に描かれたのは中城城ではなく、十五世紀前半に創建された首里城ひらきりょうの美福門と推定されている。

芳翠は美濃(岐阜県恵那市)の出身、初代五姓田芳柳のもとで洋画を学び、明治十一年に渡仏してパリで国立美術学校教授ジャン・レオン・ジェロームに師事した。同二十年に帰国するが、それから間もない本制作はまさに留学の成果を示す重要な仕事であったといえる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

海と山のあいだ ―近代日本の風景描写

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 86

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社アイワード
翻訳 黒川廣子
発行 宮内庁
令和二年七月二十三日発行

©2020, The Museum of the Imperial Collections, Sanmomaru Shozokan